

世界詩人全集

8

ヴェルレーヌ詩集

堀口大學訳

新潮社

世界詩人全集 8

ヴェルレーヌ詩集

昭和四十二年十一月十五日印刷
昭和四十二年十一月二十日発行

価五〇〇円

訳者 堀口 大學

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話(360)二二二 振替東京〇〇〇

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 新宿 加藤製本所

(乱丁、落丁本はおと
りかえいたします)

その二（ささめきの声は……）

二四

その三（巷に雨の降るごとく……）

二六

その四（そうなの、赦しあうのが）

二九

その五（白魚の細き指の……）

三〇

その七（たったひとりの……）

三三

その八（広い野に……）

三三

その九（川ざりとざす……）

三五

ベルギー風景

ワルクール

二五

シャルルロア

二六

ブリュッセル（簡単な壁画）

二四

ブリュッセル（木馬）

二四

マリーヌ

二五

夜の鳥

二七

水彩画の章の内

グリーン

二五

スプリーン

二六

ストリート その一

二五

その二

二五

乙女妻

二六

若い哀れな羊飼ひ

二六

ビーム

二六

ロンドン・ブリッジ

二六

知恵

初版の自序

二七

巻の一

1（黙々と馬を駆る……）

二七

5（女たちの美しさ……）

二七

6（おお、君たち……）

二七

7（終日照り続けた……）

二七

8（安易ながらも……）

二七

16（君がためにと……）

二七

17（いとも小さく……）

二八

22 (わが魂よ……)

一八三

卷の二

1 (おお、わが神よ……)

一六

4

その一 (神われに宣いぬ……)

一六

その二 (われ答えて言いぬ……)

一九

その三 (——われを愛せ——)

一九

その四 (——主よ、そは過ぎたり) 一九

その五 (——われを愛せ……)

一九

その六 (——主よ、われ怖る……)

一九

その七 (——そは可能なり……)

一九

その八 (——ああ、主よ……)

二〇

その九 (——哀れなる魂よ……)

二〇

卷の三

3 (希望は家畜小屋の……)

二〇

4 (おとなしい孤児として……)

二〇

5 (暗く果てなき……)

二七

6 (屋根の向うに……)

二八

7 (なぜかは知らぬが……)

二二

9 (とぎれとぎれに吠えながら……)

二三

13 (生垣はむっくりした……)

二五

15 (大寺院よりも……)

二六

昔と今

巻頭前口上

三三

ピエロ

三三

詩法

三四

おかしな忠告

三七

厭な奴

三三

愛

X夫人に

三七

或るやもめの言葉

三九

ヴィクトール・ユーゴーに

四三

リュシアン・レチノア詩篇

1 (私の息子は……)

二四

5 (愛に夢中に……)

二五

10 (彼、スケートが……)

二六

13 (よかった、やっと……)

二七

20 (慈善病院の……)

二八

平行して

無実の印象

二九

同じく 又

三〇

バルコンの上

三一

奉献

E……に与う

三二

幸福

この陽気すぎる男に

三三

正直な貧乏人よ

三三

一生がもし

三四

罵詈

メツツ

三五

☆

解説

(堀口大學)

三六

ヴェルレーヌ年譜

三七

ヴェルレーヌ詩集

土星の子の歌

ウーゼエヌ・カリエールに

序詩

名に恥じぬ古い時代の《聖人》たちは

信じておつた（当るも八卦）、

天空に吉凶禍福読みとりうると、

星の運勢身に受けて人は各自に生れてくると。

（夜空にさぐる星占の神秘の説も、幾度か、

深い心は解し得ぬ浅墓びとには嘲笑れた）

さるほどに神降し占者たちの飯の種

凶つ土星の氣を受けて生れた者の一生は

不幸苦勞のどちらにも事は欠かぬと

何やらの古文書に見えているとか。

病的な《空想力》が働きすぎて

※ Eugène Carrière は一八四九年生れのフランスの画家。ヴェルレーヌと親交があり、白い顔ひげのある

《理性》の努力も無駄とやら

此奴らの血液たるや、毒薬ほどに利がよく

溶岩ほども燃えていて、乏しいままに沸き立ち流れ

悲願の《理想》焼き亡ぼすと。

《土星の子ら》は不幸、生きるも死ぬも不幸

(不死の奴なら別格だとさ)

生涯の構図の線をとごとく

悪い《感化》が引くからだとさ。

A Eugène Carrière

かえらぬ昔

思い出よ、思い出よ、僕にどうさせようとお言いなのか？

その日、秋は、冴えない空に鶴を舞わせ

北風鳴り渡る黄葉の森に

太陽は単調な光を投げていた。

晩年の詩人の肖像が残っている。この詩には、自分を不運な宿命に生れついた土星の子のひとりと判断し、悲しい未来を予想、青春時によくある絶望感が歌われている。水不死の奴なら別格だとさ。フランスでは、アカデミー会員を「四十人の不死の人たち」と呼んで尊敬するが、若いヴェルレーヌにはそれが気に入らなかった。

僕らは二人^{ふたり}つきりだった、僕は夢見心地で歩いてた、

彼女も僕も二人とも、髪の毛も胸の思いも、吹く風になぶらせて。

ふと僕のほうへ思いつめた瞳を向けて、さわやかなその声が尋ねてくれた、

「あなたの一番幸福な時はいつでした？」

彼女の声はやさしく天使のそのように朗らかに響き渡った。

僕の慎^{つつま}しい微笑がその間に答えた、そして

遠慮がちな気持で僕はその手に接吻した。

——ああ、なんと、咲く初花^{はつはな}のかんばしさ！

ああ、なんと、恋人の唇もれる最初の応諾^{ウツイ}の

うれしくも、やさしくも、人の心にささやくよ！

Nevermore

※原題の *Nevermore* は英語。多分、この詩の作られた当時、ボードレールの翻訳でフランスに伝えられた A・ポーの『大鴉』のリフレインからの思いつきだろうが、この詩は、ボードレール風でも、ポー風でもなく、ヴェルレーヌ独特の気品と哀愁が感じとられる。

三年後

朽ちて危うい柴の戸押して

小さな園へ僕は入った

朝の日かげはやさしくあたりを照らし

花の一つ一つに露がきらめいた。

何一つ変らなかつた。あの日のままのすべてを僕は見出した、
生えからむ鳶の青葉のトンネルと、その下の籐の椅子……

噴水は今日もなお昔のままに、銀いろにささやいて、
はてしない嘆きの歌を歌いつづける一本の老木の柳。

ばらの花昔のままにわななけば、昔のままに

ほこりかに、百合の花、風にゆれ。

往来する雲雀さえ昔のそれと変らない。

※ヴェレダの像を—Velle-
daは古ローマのヴェスバ
シアン皇帝統治下のゴールの
巫女であり、女子言者で
あったが、キヴィリスの謀
叛を助け、ローマに捕われ
の身となって世を終った